



東深沢中だより

<https://school.setagaya.ed.jp/thiwa>

みしまの森学舎
世田谷区立東深沢中学校
校長 本田 仁
令和7年11月28日
第7号

知らないことから生まれる偏見(人権週間)

校長 本田 仁

来月の12月10日は「世界人権デー」です。1948年のこの日に国際連合で「世界人権宣言」が採択されました。「すべての人は、生まれながらにして自由であり、尊厳と権利について平等である」とうたわれたこの宣言は、今も世界中の人々にとって、人権の基本となる大切な指針です。日本でも毎年12月4日から10日までを「人権週間」と定め、全国で人権を尊重する取組が行われています。

「人権」という言葉には「誰もが安心して、幸せに生きられるようにすること」という意味もあります。人権は、特別な人だけのものではなく、すべての人に平等に与えられた権利です。友達を思いやること、相手の気持ちを考えて言葉を選ぶこと、困っている人に優しく接することなど、これらの行動こそが、人権を守る第一歩なのです。

皆さんは「ハンセン病」って聞いたことがありますか。日本の歴史の中でも、人権が軽んじられた時代があります。その一つが東京都の人権課題の一つである「ハンセン病」への差別と偏見です。ハンセン病は、かつて「らい病」と呼ばれ、正しい知識が広まっていなかったために、「うつる」「怖い病気だ」と誤解され、多くの患者が社会から隔離されました。家族や地域から離され、長い間、一般の社会の中で生きることを許されなかったのです。

しかし、患者の方々は、つらい差別の中でも「自分たちは人として生きる権利がある」と声を上げ続けました。やがて、多くの医師や支援者、市民がその声に耳を傾け、国の制度や社会の意識を変えていく運動が広がっていきました。2001年には国が「隔離政策は誤りだった」と正式に謝罪し、現在も患者や家族の尊厳を回復するための取組が進められています。

この運動を支えた方の一人に、熊本県の「菊池恵楓園（きくちけいふうえん）」で暮らしていた入所者の方がいます。その方は、「私たちは病気ではなく、人間として見てほしい」と訴え続けました。社会の誤解や偏見をなくすために講演を行い、学校を訪れて子どもたちに自分の経験を語りかけたそうです。その言葉には、長い苦しみの中でも失わなかった「人間の dignity（尊厳）」がありました。

その姿から私たちは、「人を見た目や病気で判断せず、心で向き合うことの大切さ」を学ぶことができます。

現代の日本では、ハンセン病はすでに治る病気であり、感染の心配もありません。しかし、病気そのものよりも恐ろしいのは、「知らないことから生まれる偏見」だと言われます。正しい知識を持ち、相手を思いやる心を育てることが、真の意味で人権を守ることに繋がります。

本校の重点目標の一つに、「『自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができる』を柱として、多様性を肯定的に捉える高い人権感覚と人権意識を醸成し、ちがいを当たり前のこととして、多様な価値観を受け入れ、積極的にいかかわり、つながり、共感・協働できる柔軟な人間関係形成力を確実に身に付けさせる。」という項目があります。

身近な生活の中にも人権を考えるきっかけはたくさんあります。例えば、SNSでの何気ない言葉、日頃のちょっとした態度によって、相手を傷つけてしまうことがあります。「その言葉を言われたら自分はどう感じるだろう」と立ち止まって考えることが、人権を大切にする第一歩です。

人権を尊重する社会とは、「すべての人が自分らしく生きられる社会」です。見た目や考え方、感じ方が違って、互いを認め合うことができる社会こそ、真に平和で豊かな社会だと思います。違いを受け入れる勇気と、相手の立場に立って考える想像力を、子どもも大人もしっかりと意識した社会が素敵ですね。

ハンセン病と向き合った人々が見せてくれた「静かな勇気」と「人間への信頼の心」を受け継ぎ、思いやりと尊重にあふれた社会を共に築いていきましょう。